



## ムハンマド風刺画と北欧諸国

レグランド つかぐち 塚口 としこ 淑子

ノルディック出版・代表

デンマークの地方紙ユランズ・ポステンが、イスラム教の預言者ムハンマドの風刺画を掲載したのがきっかけとなり、北ヨーロッパにある小国デンマークが世界の注目の的となった。

風刺画にイスラム社会は強く反発しており、抗議デモはあちこちと広範囲に飛び火を続けている。デンマークの製品も大幅なボイコットを受けていて、中近東を市場にしていた従業員千人以上を擁する酪農企業などは工場を閉鎖してしまった程だ。

現在、デンマーク製品で売り上げが伸びているのは国旗だけだ。踏みつけたり、抗議デモなどの際に燃やすための需要増である。

こうしてデンマークが引き起こしてしまったマイナスイメージは国境を越え、その他の北欧諸国にも波及した。大使館が焼かれ、商品がボイコットされたりしている。

普通、ヨーロッパを旅行して感じることは、北欧諸国(デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランド)についての関心も知識もかなりうすいということだ。スウェーデンの首都はオスロとか、コペンハーゲンだろうと言われるだけではない。イタリアのアイスクリームには「ノルウェー」などと名前がつけられているし、街角には北極熊がうろついているようなイメージがあるようだ。

ヨーロッパ圏内でもそのありさまだから、地理

的な距離が遠くなればなる程、知識もそれにつれてうすくなるのも不思議ではない。確かペイルートだったと思うが、デンマークの大使館を焼くついでに、スウェーデンの大使館にも火がつけられた。また、間違っってドイツ人が誘拐されたりもしている。ドイツもデンマークに隣接しているし、同類扱いにされても不思議ではないかもしれない。

しかし、同類扱いにされるほうにとってはかなり心外なのである。とういのも、北欧諸国はそれぞれ独自のアイデンティティをもっているからだ。今回のムハンマド事件についても、それぞれ国毎に独自の見解がある。

ノルウェーでは最初、デンマークと連帯すべきという意見が支配的で、新聞にユランズ・ポステン紙の風刺画が掲載された。とたんに、ノルウェー製品のボイコットや建物の焼き討ち、ノルウェー人や企業への迫害などがはじまった。すると政府は、デンマークとは正反対にすぐさま全面的な謝罪を表明した。圧力に負け、あまりにも簡単に謝罪しすぎると陰口されるくらい素早かった。以来、デンマークを支持する発言は一切していない。

私の住むスウェーデンでは、現在に至るまで一貫してかなりクールな態度で成り行きを見守っている。最初、声高だったのはノルウェー同様、隣国との連帯を示すという意見であった。黙ってなにもしないのは、隣国デンマークはじめ西欧社会



の連帯精神を裏切る行為だというのが理由である。しかし、いまはその種の声はあまり聞かれない。むしろマジョリティは、風刺画はイスラム社会を侮辱するものであるし、火に油を注ぐような行為は避けるべきという見方のようだ。それに自国製品の輸出に支障をきたすとまずいし、国内にはムスリム系の移民が数多いことなども、実利的なスウェーデン人たちはちゃんと意識しているだろう。

スウェーデンには、もともと摩擦や正面衝突を避け、話し合いで物事を解決するという風土がある。それは対岸にあるデンマークには、言いたい事がいえずディベートは不在、政府が世論を牛耳る専制国家と映っているらしい。

それを受けてスウェーデンでは、言論の自由を隠れ蓑にして、マイノリティを抑圧をしているのだと反論する。

とにかく、北欧諸国間で、隣国について独断と偏見も混じるイメージがつくられていて、自国は「ノーマル」とする風習が存在している。ここで紹介するのはスウェーデン人のもつ隣人観である事を断っておくが、フィンランドの男性は酒飲みで、ぐうたら、なにかあるとすぐナイフを振りまわす。女性はしっかりしていて働き者といったイメージが長年支配的であった。しかし、ノキアの携帯電話が世界中で使われ、経営難のSASとは対比的にフィンランド航空が伸びている昨今、ナ

イフを振りまわす話はあまり聞かなくなった。今回の出来事に関してのこの国の態度は控えめである。

一風変わったところがあり、スキーなどのアウトドアスポーツが好きと言うのが、ノルウェー人のイメージだ。過去に長期にわたりデンマークとスウェーデンに支配されていた関係から「弟コンプレックス」があるとされている。

最後にデンマークであるが、ワケ知りで大人、ユーモアの精神に富み、美食を楽しみ、人生をエンジョイしている人達、というのが長年のイメージであった。ところがムハンマド事件が起こる数年前から、国内の外国人排斥を公言する政党が勢力を伸ばし、かなりの外国人とデンマーク人のカップルが南スウェーデンに移住する傾向が目立ち始めた。なんだかおかしいなと思っていた矢先に、風刺画問題でスウェーデンでつくりあげられていたイメージにはなかった人種差別の面が一挙に表面化された。スウェーデン人は意外な面を知って驚き、隣国の行く末を心配している。

これだけそれぞれ独特であると考えている北欧諸国であっても、一步圏外に出れば、同じように見られしまうのである。これを将来どう考えていったらよいのであろうか。そういえば同じことが日本、中国、南北コリアについても言えるかもしれない。